

【紹介】『西洋見聞図解 前輯 全』(1)

米田 達郎*・鈴木 小春

工学部 総合人間学系教室
本学 非常勤講師
(2022年12月1日受理)

Introduction of Seiyō ourai for Child
by

Tatsuro YONEDA, Koharu SUZUKI,

Department of Human Sciences, Faculty of Engineering and part-time lecturer, Faculty of Engineering

Abstract

In Japan, early in the Meiji period, people became interested in “Kyurigaku” and read many books about it. “Seiyō Kennbunn zukai” is one of them. From the information at our disposal, we learn about Western lifestyles and customs. “Seiyō Kennbunn zukai” was written by “Uryū Masayasu” in 1874. It has two volumes, we reprint the first part this time.

キーワード ; 明治期啓蒙書, 西洋知識の受容, 瓜生政和, 理科学語彙

Keyword ; Books for enlightenment in Meiji-era, Process of Acceptance of Western Science in Japan, Uryū masayasu, Word of Science course

資料紹介 「西洋見聞図解」前編 全(1)

工学部 総合人間学系教室

米田達郎

非常勤講師 鈴木小春

(二〇二二年十二月一日受理)

一、はじめに

瓜生政和(一八二一年～一八九三年)は、江戸時代末から明治中期に活躍した作家・編集者である。江戸時代末には梅亭金鷲の名で『妙竹林話七偏人上下』などの滑稽本(江戸時代末の小説)や、『春宵風見種』などの人情本(江戸時代末の小説)を執筆し、明治時代以降は、『西洋新書』『西洋見聞図解』などの啓蒙書を出す一方で、『寄笑新聞』や『团团珍聞』などにて世相を風刺している。

ここで注目したいのは、江戸時代末に庶民向けに執筆していた人物が、明治時代に入ってから西洋に関わる啓蒙書を執筆する際に、どのような表現を用いているかということである。例えば明治四(一八七二)年～明治五(一八七三)年に刊行された仮名垣魯文『安愚楽鍋』は、会話体で記されており、文明開化に対する明治時代の庶民の様子を写實的に描いている。日本語学の立場からは、明治時代初期の口頭語を反映した資料として重要されている。しかし、仮名垣魯文以外の著作は口語的ではないとの理由から、明治時代初期の資料として活用されることはほぼないという状況である。本稿で取り上げる『西洋見聞図解』は、庶民を意識していたと思われる瓜生政和が執筆したものであり、啓蒙書とはいえ、使用されている表現は、当時に広く通用していたものではないかと予想される。この点は今後、精査する必要があるが、それ以前に瓜生政和の著作自体が日本語学の分野のみならず、他分野でも活用されていないという事実もある。そこで本稿では今後の研究の一助とするために、大阪工業大学図書館に所蔵される『西洋見聞図解』前編・二篇の計二冊を数回に分けて翻刻紹介することにする。

二、書誌

『西洋見聞図解』は前編と二編の二冊ある。CINiiにて所蔵される図書館を確認すると、京都大学(法学部)や大阪大学の図書館など全国9つの大学があった。国立国会図書館デジタルコレクションにおいても公開されているが、底本とは構成が異なる。本来であれば、各版の関係についても触れる必要があるが、この点についてはひとまず置いておく。本稿で底本とした『西洋見聞図解』の基本的な事項を記しておく。なお、ここに記した書誌情報は丁数を除けば前編・二編に共通したものである。

筆者 瓜生政和

刊年 明治六(一八七四)年

発行元 東京書肆 二書房発行

外題 西洋見聞図解 前編 全 見返しに印アリ

内題 西洋見聞図解卷之上

大きさ 縦17.9 cm×横11.9 cm

紙数 前編：三八丁 二編：三八丁

裏表紙 墨筆にて井上清三郎とあり。

三、凡例

本文の翻刻に際して、次の方針のもとに行うことにした。

(一) 適宜、改行を行い、句読点、濁点、並列点を施した。外国地名・人名など、カタカナ表記されているものについては底本のとおりとし、その語頭にある符号には「を宛てた。

(二) 本文に使用される漢字については原文どおりとしたが、やむを得ず新字体を使用した場合もある。また、合字は仮名書きにした。

(三) 丁数及び表裏は()にて示し、丁数の変わり目に記すようにした。

(四) 底本にある挿絵は紙幅の都合上、本稿にて示している丁数とは一致



瓜生政和著
東京書肆
二書房發行
秘御為真邊題 印印

☆右頁 瓜生政和著 印
西洋見聞圖解
東京書肆
二書房發行

☆左頁 印
開卷有益

四、翻刻本文

【図表一】

していない場合もある。

(五)挿絵は【図表】として示し、そこに知るされる文言は☆印を付して示した。ただし、紙幅の都合から本稿で示した文言の位置は、【図表】の前やその下部に示している。

(六)本文中には、現代において好ましくない表現が使用されている。出版当時を尊重し、敢えてそのままとした。

- 目録
- 日月並地球の説
 - 日輪より世界を見るの図
 - 五大洲並五大洋の説
 - 世界高山の説
 - 噴湯山の説
 - 世界大河の里数
 - 水却衣の説
 - 世界人員の説
 - 同人種の説
 - 蒸気機関の説
 - 同船の説
 - 傳信機の説
 - 避雷柱の説
 - 犬の説
 - 獅の説
 - 地球海山平地割合の図説
 - 引力追力の図説
 - 山並海の説
 - 噴火山の説
 - 鑛山の説
 - 泳気鐘の説
 - 世界第一の大艦
 - 同男女風俗の説
 - 同宗旨の説
 - 蒸汽車の説
 - 瓦斯燈の説
 - 鉄砲発明の説
 - 風船の説
 - 象の説
 - 虎の説
- (二ウ)

○獼猴の説

○駱駝の説

○雪獣の説

○狼の説

○駝鳥の説

○鷺の説

○通計三十六員

(二才)

凡例

一 千八百何年とあるハ西洋の紀元よりにして、何年前と有ハ明治四辛未年よりなり。

一 里程ハ日本の三十六丁一里を用ゆ。尺度も同曲尺をもちゆ。

一 金銀ハ六十目一兩高に直して何兩何分と記す。

一 諸書に詳かに出せしものハ其大畧を挙るまでにす。

一 他に漏たるもの、又ハ有りても僉なるハ、微細を欲すと雖も短緒なれば、猶意の如くならず。然れども文体長短ありて整しからざるハ是の謂なり。

(二ウ)

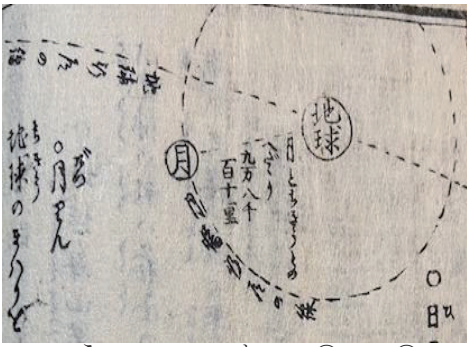
西洋見聞図解卷之上

東京 瓜生政和 編集

○日月並地球の説

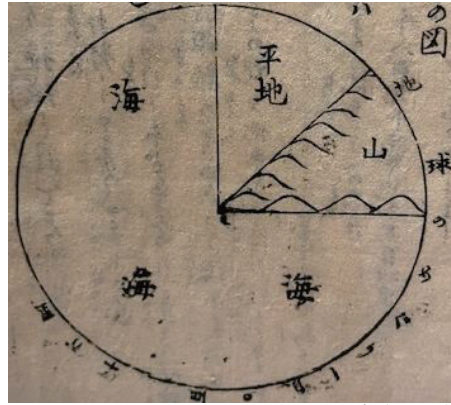
地球ハ太陽の周圍を巡る遊星の二ツにして月ハ地球の附属の星なり。

世界を人の住居に譬へて見れば、大空ハ天井、地球ハ疊の上、地極極樂ハ縁の下の様に思ひしなれども、然に非ず。月星の世界より地球を見れば、地球より月星を見るが如く。矢張大空の中に一点と丸く光りて見ゆるなり。夫が証拠にハ、東へ向けて船を何処までも走らすれば、周圍と巡りて西より帰り(二才)来り、西へ向けて船を何処までも走らすれば、周圍と巡りて東より帰り来るなり。然して船の往処に從がひ、仰向て上を見れば、皆蒼蒼たる大空にして、更に變りたる所なし。又地上の丸くして勾配あることハ、海の沖中より来る蒸氣船にして知るべし。初め海の水の上遙かに、烟りの上るを見る因りて、向ふ地に火事にも有やらんと怪しむうちに、僅に帆柱の先頭ハれ出、彼の帆柱おひく長くなり、終に船の甲板を見せ續いて、全体を見るに至る。地球大なりといへども、直径六七里隔つれば、如何なる大船も丸き勾配の下に入りて見ゆることなし。故に遠江の沖中より来る船、先づ富士山の頂上を見(二ウ)、夫より身延の七面山、箱根の駒が嶽、伊豆の天城山、駿劔の愛鷹山と段々に高き頂上よりして見え来るなり。



【図表三】
 ☆ 月とちきうとのへだざり九万八千百十里
 ☆ 月輪行道の條

☆ 地球行道の線
 ○ 日の世界より地球と月を見るの図
 ○ 日月と相對したるものゝやうに思ひ、大
 きさも同じほほどに見ゆれば月ハ距離近く日
 ハ距離遠きゆゑなり。俗に云へば、日ハ地き
 うの親分、地きうハ月の親分なること図を



【図表二】
 ☆ 地球のめぐり一四〇百十六里

○ 地球海山平地割合の図

此地球の形ハ各国の絵図にハ非ず。只
 海と山と平地とを分れば、此位の割合
 なるを記せし也。地球を八ツ割にして
 六ツを海とし、二ツを平地となし二ツ
 を山と為すこと図の如し。(二オ)



【図表四】

見て知るべし。
 ○ 日りんより地きうへの遠さ 三千八百九十五万七千五百四里
 ○ 月りん地球のまはりを一ヶ月にして一とまはりするなり。
 ○ 日りの丸のさしわたし 三千六万里
 ○ 地きうの丸のさしわたし 三千二百四十七里
 ○ 月りの丸のさしわたし 八百五十五里 (二ウ)
 ○ 地球日りの周囲を行道する道のり 二億四千八十六万七千里
 地きうハ日のめぐりを一年にして一とまはりするなり。

○引力追力の説

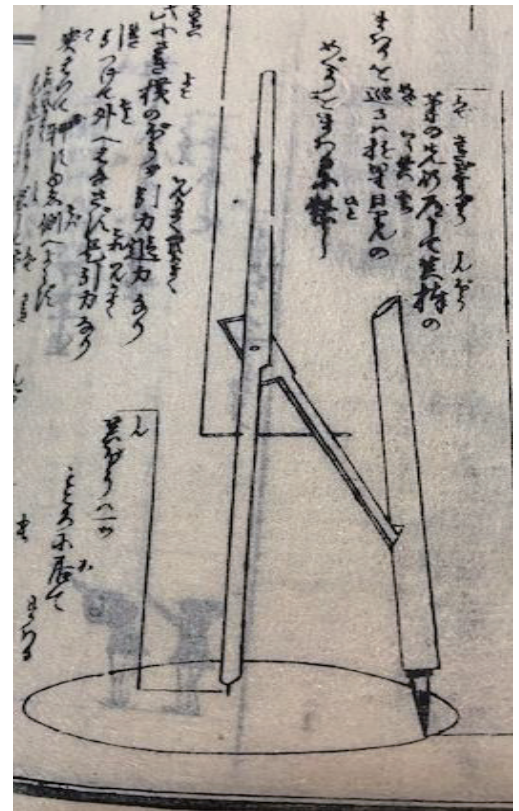
日月星辰空中に在て、万古行道を違へざるハ引力追力の為すところに
て、日輪ハ地球を引んとし、地球ハ日輪に近付んとす。然れども追力とて
相互ひに離れんと為るの力と有れば引ん（三才）と為る力と離れんと為
る力を相互ひに持合て、確平為ること、筆規の真棒と筆との如くなり。
図を見て知るべし。

【図表五】

☆ 筆の先、行道して真棒のまわりを巡るハ、遊星日りのめぐりを
まはるに整し。

☆ 此小さき横のぼうが引力追力なり。引つけて外へはなさず。是
引力なり。突はりて押すゆゑ、側へよらず。是追力なり。然して筆
の先よく真棒の周囲を行道す。引力追力との理に近し。

☆ 真ぼうハ一ツところに居てまはる。日りの自転と
おなし（三ウ）



○五大洲並 五大洋の説

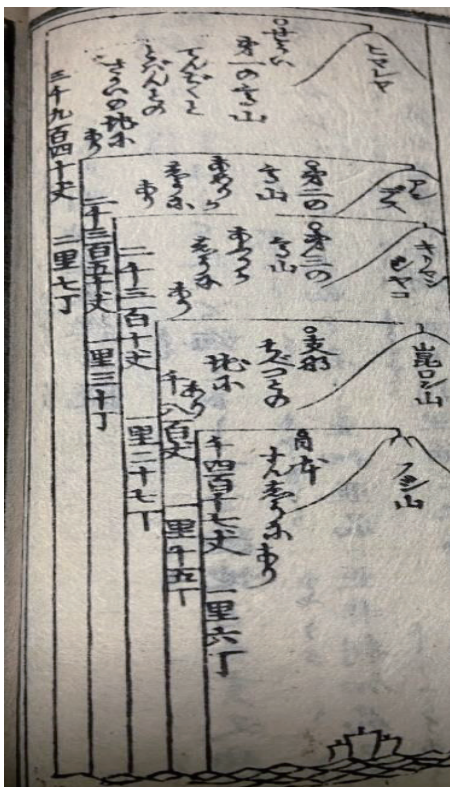
地球を四ツ割にして、三ツを海となし、一ツを陸地となす。又陸地を五
ツに分けて、是を五大洲と名く。○亜細亞洲○亞非利加洲○歐羅巴洲○
南北亞米利加洲○澳大利亞洲これなり。又澳大利亞洲へ其国の近き傍りの
島嶼を併せ、阿西亜尼亞洲ともいふ。海も又五ツに別ツ。所謂○太平洋○
印度洋○大西洋○北氷海○南氷海是なり。然れども、洋ハ世界中へ續き
て切々のものに非ず。亜細亞、亞非利加、歐羅巴と地續きなれども、境界
を付て三大洲と為したるものと同じ。（四オ）

○山並海の説

地球の表面ハ高低凸凹にして、大いなる凹ミヘ塩水を満しめたる処を海といひ、小狭き凹ミヘ水を湛へたる処を湖と為す。又陸地の高く空へ突出したる処を山といふ。今地球中の最高き山の一二を挙て左に圖す。

【図表 六】

- ☆ ヒマレヤ ○せかい第一の高山。てんぢくととばんとのさかいの地
にあり。三千九百四十丈 二里七丁
- ☆ アンデス ○第二の高山。あめりかしうにあり。二千三百五十丈
一里三十丁。
- ☆ キリマンジャコ ○第三の高山。あふりかしうにあり。二千三百十
丈 一里二十七丁。
- ☆ 崑ロン山 ○支那チべつとの地にあり。千八百丈 一里十五丁。
- ☆ フジ山 ○日本すんしうにあり。千四百十七丈 一里六丁。(四ウ)



山の高さ一千四百丈に達すれば、日輪真下の大熱国といへども年中雪絶ることなし。

世界中に我國浅間山の如く燃る山三百餘ほど有りといへども、第一の噴火山とするものハ、南亜米利加の「カトハチシー山なり。海面より高さ一里半にして、峯頭より噴昇る火焰八丁余火を噴出す音三十二三里の外まで聞ゆるといふ。

山中より温泉の湧出す処、数限り無しといへども、世界第一とするものハ、北亜米利加の氷島に「ケイスルスと云へる湯を噴出す山あり。洶々として、白練の如き熱湯を吹上ること、二十五(五才)間余の高さに至る。伊豆の國熱海の温泉ハ石の穴より横に一丈ほど噴走らし、又相

箱根山の湖水西の岸に姨子といふ温泉場あり。湯風呂より常に湯吹上るを五六寸に至る眼病の人多く是に沐浴す。

世界第一の金山を北亜米利加合衆国領の中、「桑方西斯哥の港とす。はじめ三ヶ年ほどの間ハ、一年に九千万両を控出し、今にても毎年三千万両を控出し、銀もまた出るなり。

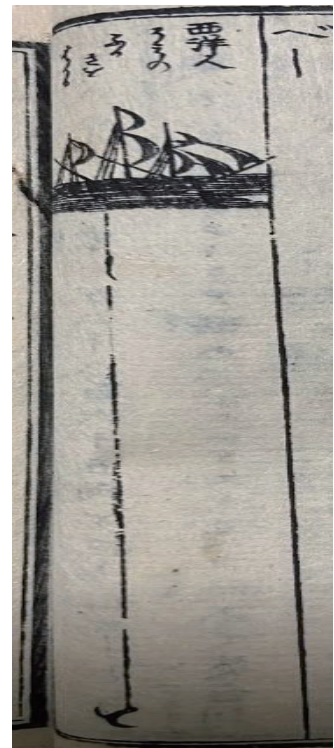
又北亜米利加加拿陀國ハ英吉利の領分にて此國にハ七十三ヶ所の金の

鍾山ありて、千八百六十八年今より四年前に、僅（五ウ）三月の中に二百零七万二千八百六十五両を控り出せしといふ。又埃太利砵「ビクトリア國の「ハルクレースト云へる処にて英吉利人金山を見出し、八ヶ年の間に三年零四十一億一万五千四百八十四両を控出す金鑛山多しといへども、此「ビクトリアを以て魁となす。夫故英吉利の本國にハ、金銀山絶て無しといへども、北亜米利加砵の「加拿陀と埃太利砵の「ビクトリアとよりに出る処の金銀を本國へ運んで以て、金銀の出る土地よりハ却て金銀沢山なりとぞ。

銀山ハ北亜米利加砵中の「墨西哥國を以て最大一とす。今日本（六オ）支那とうに用ゆる元銀ハ多くハ墨西哥國より出る所のものなり。海の深さに至りてハ山の高さより猶遠し。千八百五十二年、今より十三年前、英吉利人南亜米利加砵と亜非利加砵との間に於て、海底を探り則測せしに、四里二十七町ありしとなり。里俗駿砵洋を千尋立と呼びて、深きの極めと思ひ做せしが、彼れを以て是を見れば、又空言とも做し難かるべし。

【図表七】

☆ 西洋人、うみのふかさをはかる。（六ウ）



世界の大河の長さを記して其一二を挙ぐ。

「ミシシッロー河	千六百四十余里	北亜米利加合衆國
「アマソネ河	千五百里	南亜米利加砵
「ナイル河	千四百三十里	埃國
「揚子江	千三百十里余	支那
「エニサイ河	千百九十里	亜非理加砵
「黄河	千六十余里	支那
「ラビ河	千四十里	亜非理加砵
「黒龍江	九百四十余里	滿砵（七オ）

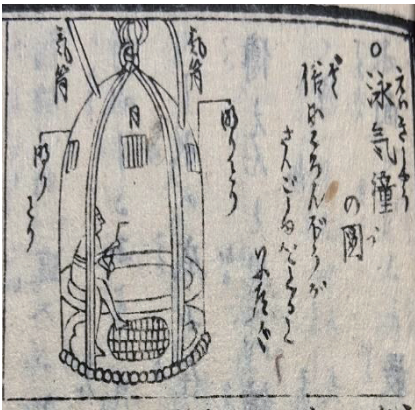
○海中に用ゆる器械の説

西洋人泳気鐘を作つて、海の底の物を採るの便と為す。泳気鐘ハ鍍を以て、高さ五尺口の闊さ八尺の鐘の形ちの物を鑄り、上の方に四ツの窓を明け、玻璃にて是を塞ぎ明り取りとなし、又明り取の旁に氣を通ハす竅を設け、細き管を附て、水の上まで出ず。鐘の内の天井に数多の鉤を下に、是に入用の器物を懸け、鐘の内の旁に柵を二ツ出し置、人との上に在りて、船より俯伏に纜を以て、是を水中へ下すに、鐘の内に空氣籠り、たれば水鐘の内へ入ることなし。故に水の中途或ひハ（七ウ）

【図表八】

☆ 泳気鐘の圖 俗にくろんぼうがさんごしゆをとるといふ道ぐ。

☆ 明りとり 気筒
気筒 明りとり



水の底に在りて海中の種々の物を採る。然れども、泳気鐘水中へ入ること、三丈四尺を以て限りとす。三丈四尺より深く水中へ下れば、水の力、鐘の中の空氣より強くなり、鐘

の内へ水浸し入るなり。故に上より氣を添て水の力に敵せしめ、水の力と均敷やうに為るなり。鐘の内僅かに咫尺の空所なれば、新しき氣を入ること多からざれば、中の人、呼吸詰り、忽地死亡に至る。其新しき氣を通ハすの法ハ、船の人氣機筒を以て、空中の氣を取り、是を桶の中へ放ち入れ、（八才）繩を以て桶をつなぎ、桶の底へ皮の筒を附、これを鐘の旁らに沈むるなり。鐘の中の人呼吸詰り、息苦舖なれば、桶の皮の筒を採りて、鐘のうちへ牽こみ、皮の筒の先を明れば、桶の中の新らしき氣、鐘の内へ這入るゆへ、鐘の内の壞氣機竅より、外に散じて人の呼吸するによし。凡て海の水ハ澄て清ければ、日の光り下まで照らし、水の底に在りても、文字書るなり。鐘の内の人言辞を傳えんと思へば、鐘を叩きて、是を報ず。言辞多きときハ、板へ書て浮べ上るなり。夫故に船の上の人ハ皆耳を俯し、目を凝して水面を守ること、最嚴なり。或西洋人難船して沈ミし財物を（八ウ）採るに此法を以て仕たるに、海底の財物を自在に採り得て、面白ければ攷々として休まず。夜に入りても猶燭を点じて是を為せしに、海底の音魚怪蠶燈火の光りを望んで集り来り。人の手を嗅、足を嗅、呑嚙ハんと欲するの勢ある故、大いに恐れ鐘を叩くこと急なれば、船中の人

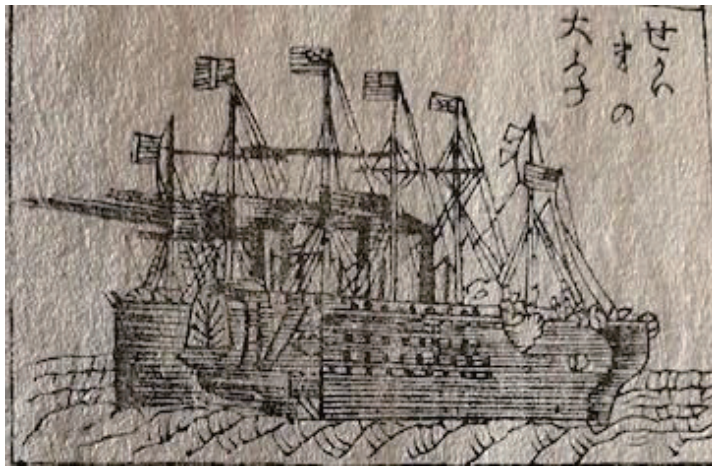
頓に引上しに、魚鱈人を逐て浮ミ上り、水際にして散じ去る。是よりして夜ハ此業を為さずといふ。

印度國に大樹あり。此木膠汁甚だ多し。採りて器の用と為すに、其實堅く、火水といへども、傷ふを能はず。刀鋸の刃も（九才）容易ハ立がたし。長さ一寸に製し、之を引バ一尺餘に延び、放せば復縮んで元の一寸となる。年を経て変ぜず。壞れず實に他の物の及ぶべきにあらず。俗呼んで象の皮と為す。西洋人の襪帶・腰の帶など多くハ、此ものを以て作る。水却衣といふ物も亦是を以て製す。水却衣ハ着る人天窓より足まですつぽりと包むなり。脱バ儼然として、人の壳の如く見ゆ。肥太りたるものにて、瘦たる者にてても、体に皆合ふ。左右ともに腋の下に一ツの長き筒をつけ、夫より生気を透す。両眼の所へハ玻璃を張て明りを透して見る。海の底に（九ウ）至りて、業を為さんとするにハ、此衣服を用ゆれば、水衣服の内へ入らず。腰に鉛の錠を纏ひ足に鍔の靴をはけば、体水に浮ず。依りて水底に至つて、両腋の下の筒を泳気鐘の内へ搭入れれば、自然生気有りて、以て呼吸通ふ。故に水の中に在りて、半日ぐらい動作を為しても、常と変りたることなし。西洋の人戦争の折から、此法を用ひて、敵の船の

底へ穴を鑿ちて是を沈め、又ハ珊瑚樹・珠玉とうを採るに、尤妙用を為すなり。然れども、間水中にて淹死するもの有るハ、腋の下の筒蟠り屈して氣の通ふこと能ハざるに因りてなりとぞ。（十才）

【図表九】

☆ せかい第の大舟



大西洋の傳信機ハ英吉利の「ハレ
ンチア湾より北亞米理加の「チリ
ニツチ湾に達す。その距離九百七
十五里にして、深き処ハ三十五丁
ほどある海の底を引渡したるもの
なり。この音信の早きこと、此方よ
り彼方へ大抵手の脉三ツ四ツ打あ
ひだに達すといふ。仏蘭西にても
「ブレスト港より北亞米理加の
「ビル、といふ地に達す。是また

大西洋の水底を千七百八十里の間引渡す。此傳信機ハ英吉利にて造りし

物より一倍手堅固に出来しなり。海の底の傳信(十ウ)機の長さの世界第一と為るものとぞ。

英吉利の商社にて出来し「ゲレート、キーステルント号し、世界第一の大艦ハ一万千五百馬力にして、鍊造りなり。船の腹の両方に車輪を設け、船の尾にもまた螺旋の車を設く。

- 一 長サ 百五十間一尺 一幅十三間五尺
- 一 深サ 九間四尺六寸 一車の直径九間二尺
- 一 檣 六本

船中乗組四百三十六人乗客四千人を容れ、一時に十八里より二十四里を走るといふ。(十一オ)

蒸気船の一馬力ハ一抄とて、脉一ツ打間に三万三千斤の重さを以て、一尺の高さに上るをいふ。三万三千斤ハ日本の三百九十六貫目なり。英吉利の一斤ハ日本の百二十目強なり。

○世界人員の説並人種の説

昔日、西洋の遊方博士有て、天下の人民の数を合せ計りしに、大約九百兆あり。分て之を數ふれば、亜細亞の人口五百餘兆、歐羅巴の人口二百

餘兆、亜非利加の人口五十八兆、南北亞米利加の人口四十二兆といふ。また毎年死去するの人口を數ふれば、大凡二十五兆にして、毎日死去の者大凡六万八千人、一時(十一ウ)の間に死去する者、大凡二千八百五十人なり。此割合を以て計れば、三十二年にして九百兆の人、皆事々く死去するに至れば、三十二年を限り、世の中の人舊きと新しきと代り合ふに似たるを思へば、人の寿命ハ夭死する者、長生するもの推しならせば、三十二年を以て平等とする故、俚俗に人間僅五十年といへるの言辭ハ短かきものとの譬へ成るべけれど、三十二にてハ漸くに其半端を過ること、誰か寸陰を惜まざらんや。

又方今の説にてハ世界の人口十億五千九百万にして、之を分て計ふれば、(十二オ)

- 亜細亞 人口 六億五千二百万
- 歐羅巴 人口 二億六千五百万
- 亜非利加 人口 七千万
- 南北亞米利加 人口 五千八百万
- 澳大利亞 人口 二千百万

○世界人種の説

世界の人民容貌形体骨格各同じからず。是を別つに五種あり。一に莫古種、二に高加索種、三に以日阿伯啞種、四に巫来由種、五に亜米利加種と為す。(十二ウ)

莫古種ハ其人黄色なり。故に黄人と号く。亞細亞の人多く是なり。

莫古種人 四億七千万

高加索種ハ其人白し。故に白人と号く。歐羅巴の人皆是なり。

高加索種人 四億

以日阿伯啞種ハ其人黒し。故に黒人と称す。亞非利加澳太利亞の人皆是なり。

以日阿伯啞種人 八千万

巫来由種ハ其人棕色なり。故に棕色人と号く。印度諸島皆是なり。

巫来由種人 四千万

亜米利加種ハ其人銅色なり。故に銅色人と号く。亜米利加の土人皆是なり。(十三オ)

亜米利加種 一千万

又當今婦女童蒙まで能知りたる各国の人口の其一二を記す。

亜細亞の内

日本 人口 大凡三千五百万余

同

清国 支那といふ 人口 凡四千〇四十六億

印度 天竺といふ

人口 [獨立のもの七百四十一万八千五百十二人英吉利へ属するもの一千七百廿九億三万九千六百卅六人]

歐羅巴の内

英吉利 人口 二千七百六十三万七千七百六十人

同

仏蘭西 人口 三千五百四十万

同

和蘭侘 人口 三百万

同

普魯士 人口 一千七百二十〇万二千八百六十人

(十三オ)

同

瑞典 人口 三百六十四万一千六百八人

同

噠馬 人口 一百四十六万八千七百十三人

同

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
峇羅斯	目耳曼獨乙といふ	壤地利	瑞士	西班牙	葡萄牙	意大利列國	土耳其	希臘	北亞米理加
人口 六千万	人口 四千二百万	人口 二百九十四億一万一千三百〇九人	人口 二百三十九万二千七百四十人	人口 百五十八億〇七千七百五十人	人口 三百四十九万九千二百一十一人	人口 二千三百十九万五千八百三十七人 (十四才)	人口 千二百五十万	人口 百〇四万五千二百三十二	人口 二百三十一億九万一千八百七十六

同

墨西哥

人口 七百八十四万五千二百〇五

亞非利加・澳大利亞の各国、其外是に泄たるハ猶後編に記すべし。

○男女風俗の説

【図表十】

- ☆ 世界の三希風 ☆ 日本の女の帯 ☆ せいやうの女のはかま
- ☆ からの女の足



世界の中にて女の姿の異なる粧ひとする物ハ、西洋の女の大袴と支那の女の短小き足と日本の女の幅の廣き帯なり。西洋人是を三音風とするといふ。但し西洋の婦人の大袴ハ仏蘭西(十四ウ)の都の巴黎スより流行出せしなり。又日本の女の眉毛を落し、鍍金を附るをも、西洋

人奇とするよしへり。

峇羅斯國の内、「シルカツシア」と云へる所の婦人ハ顔姿形美しく、世界中

の女の名勝なるよし。

西洋人・支那人の髪を指して、長き尾と云ふ。日本人の野郎の髪を指して豕の尾をいふよし。

西洋にてハ各国ともに女を重んじて、男を軽くするの風習最も可怪。

仮令バ客に往(十五才)ても、女立ざれば男立こと出来ず。女立バ男立

ざることを得ず。西洋の女ハ烟草を吸ハざるを例と為れば、女と同席すれ

ハ、男女より許しを得ざれば、烟草を吸ふを能ハす。許しを請ても先づ

ハ用ひざるを常となす。女と同席してハ無多に滑稽を云ハず。道に女に逢

ヘバ冠り物を脱て礼を為す。夫婦家に在りて、夫ハ奴僕の如くに働らき、

妻ハ客の如くにして、只自分の心任せに日を消し、更に家事に關係あハざ

ること他人に整し。

○西洋と東洋と事の反覆する説

西洋の國々と我國と物の相反なること最も多く、撮んで二二(一五ウ)

を言んに、彼の國にてハ女を先にして男を後にす。名を上にして姓を下に

す。命日に追善供養を為さず。誕生日にハ親戚友朋を集めて饗応す。彼の

國にてハ立を礼とし、我が國にてハ居るを礼とす。彼の國にてハ寐るに

蒲団を厚くし、夜着を薄くす。彼の國の書ハ横に書き、横に讀む。我國の書ハ縦に書き、縦に讀む。彼の國の書の讀み初じめハ、我國の讀み終りとす。又鋸を遣ふに、向ふへ推し、小刀ハ刃を前へ向けて削るなど、尽く挙るに違あらず。

○世界宗旨の説

世界一般何様なる蛮夷の國といへども、神か佛かを祭らざる(十六才) 処なし。其中にも廣く弘まりて、人の尊敬する宗旨ハ

○耶蘇教 ○馬哈默教 又回々教といふ。亜刺比亜笏より發る。

○猶太教 又ゼウと云 何れも一の神を祭るを以て教えとし、宗徒甚

だ多しといへども、耶蘇教を以て第一と為す。此宗旨開祖より八百四十年

を経て東西二派と別れ、又西の派二ツに別れ、一を舊教、一を新教とい

ふ。舊教ハ羅馬教又天主教ともいふ。東の一派を希臘教といふ。英吉利・

獨乙・和蘭・北亞米理加の人民多く、新教の宗旨を用ゆ。耶蘇宗 斯繁茂

する故か。西洋各國亞米理加笏にて年号を千八百何年と記すハ、耶蘇誕生

の年を以て元年と(十六ウ)せしなり。然れば耶蘇誕生より前を古世界と

稱へ、耶蘇誕生より後を新世界といふ。人生れて名を附るより、嫁取り聶

とり、死せし時まで、此宗徒の者ハ教師の關係せざる可き事ナリ。

○ 婆羅門教 ○ 釋教 の類の宗旨猶數多有りて、皆種々の神、種々の

偶像を祭る。是らの諸宗を一ツにして「バガニスム」と名づけ、猶太教・

回々教・耶蘇教を合せて世界の四大教と稱す。婆羅門教・釈教ともに印度

の地に行るゝといへども、釈教ハ釋迦誕生の地の陽蘭島より支那・

蒙古・滿洲の方へ蔓延れり。

○ 土地に因りて人智勝劣ある説 (十七才)

赤道近くの極熱の地方にてハ、四時ともに木の実草の実など多ければ、

天然の喰料ある故、耕作の業も為さず。漁獵の営ミも勤めず。時候常に

暑ければ、寒さを禦ぐ衣服の手當にも及ばず。又住居も密ならぬかた冷し

ければ、自づと僦に成り往、人を怠惰に趣むかしむるに因りて、曾て開化

に進むこと能はず。歐羅巴諸島の如きハ亜細亜より土地狭く、産物もま

た少なれば、却て万事に勉強なし。人智日々に進ミゆき、開化月々に至

るゆへ、新發明の物最も多し。其一一の(十七才) 大畧を爰に記す。

- 蒸氣機関 ○ 蒸氣船 ○ 蒸氣車 ○ 傳信機 ○ 瓦斯燈

- 避雷針 ○ 風船 とうなり。

【図表 十一】

☆ 印度平民の圖



○ 新發明機械の説

蒸氣機関ハ英吉利の「ゼムス、ワ

ットといふ人、土瓶の口より

吹出す湯氣の勢力を計りて、此

工夫を發明なし。二十六年かゝ

りて全き物に至りたるハ、今よ

り八十六年前の事なり。此仕掛

を以て水を汲干し、田地を耕し、

山を掘り、銅鑛を製錬し、材木を鋸引し機を織り、紙を製し、板を摺り、

砂糖を拵へるなど、一切の事、尽く(十八才) 便ず。実に無類の大機関

なり。

蒸氣船ハ亜米理加衆國の「フルトン」といふ人の工夫にて、今より六十四

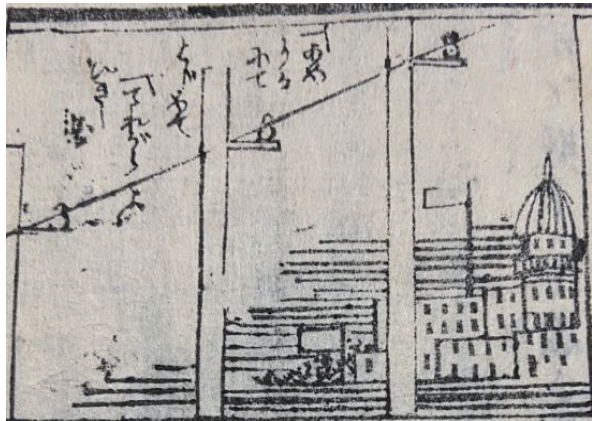
年前に出来、先試に乗りて見たるに、十六時にして六十里を走りたりと

いふ。是此船の濫觴にて初めハ川船・内海の渡し船などに用ひたりしが、

終に軍艦・商船・飛脚船など、為すに至れり。

蒸気車ハ英吉利の「ジョンジ、ステフェンソンといふ人の工夫にて、今より五十九年前に出来、夫より十三年過て、鑛道の工夫を發明し、「ストツクトンといふ処より「ダルリントンの間だ二三里ほどの所へ鑛道を通じ、蒸気車を用ひたりしを始めとして、目を追て盛大に（十八ウ）なり。当時

にてハ英吉利の蒸気車の数七千五百鑛道の長さ五百里に至り、
【図表 十二】 ☆ 「あめりかにてはじめて「てれぐらふひきし圖



亜米理加合衆國にても鑛道の長さ四千八百十六里に至る。傳信機ハ仏蘭西の「レ、サジとふ人の發明なりといへども、未だ全たき物に至らざりしを、合衆國の「モールスといふ人、五年の間、種々に工夫せしに因て、大いに是を改正し、今より廿七年前合衆國の首都華盛頓府より「バルチモール府まで一七八里までの間に線を通じ、兩府の消息を報じたりしを、はじめとな

し、又海の底に掛たるハ、今より廿年前英吉（二九才）利の「ドーウルといふ所より仏蘭西に通じたるを始めとなし、今にてハ西洋各国亜米利加にても蜘蛛の巣の如く引張、既に英吉利一國中の傳信機のミにて、長さ一万九千五百里に至るといふ。

瓦斯燈ハ獨乙國の「ウキルソンといふ人、英吉利首都倫敦に於て工夫を設け、今より六十六前初めて油蠟燭の代りに用ひ、市街を照すこと成たれども、其後瓦斯を蓄へ置たり所より火を發し、夫が為に人多く損害せし故、一度止になりたりしが、今より二十九前に俟行ハれ出し、當今にてハ西洋各国亜米利加の国々にても、是を用ひざるところ無しといふ。瓦斯燈ハ地中より管を以て、（十九ウ）石炭の氣を通じ、往来またハ門下口の常夜燈、家の中の掛行燈の様なる処へ皆尽く用ゆるなり。然れば、西洋各国とも都府の町ハ夜に入ると瓦斯燈を点し連らね、遠く之を見渡せハ、其風景いと美しく実に人目を快からしむるに絶たり。

鑛砲並火薬の發明ハ、千四百年の頃嘔囉巴人の工夫のよしを以て、世間に流布するといへども、然に非ず。「キリス紀年前、漢の人の發明なりしを、嘔囉巴勃の内、普魯士國の和尚「ベルソルド、スチワルツといふ人、猶改正

して、千三百四十六年の戦争に始めて是を用ひ大いに勝利を得たるより、
 嘔囉巴各國日々工夫を凝し、月々に發明すること多く種々(二十才)の
 便利を盡したるより、戦争の勝敗ハ只此一機械に有りと、終に鎗劔を捨
 甲冑を廃すことハなりたり。然れば此器械に限らず、諸物ともに發明の
 起源ハ多く、漢土に有るといへども、事皆僉にして、其盡置しを嘔囉巴人
 此法に基き種々の工夫を加えて以て、終に深妙の奥旨を極むるハ究理学
 の行るゝが故なりけり(二十ウ)

見聞図解上 終

西洋見聞図解卷之下

○避雷柱並風船の説

東京 瓜生政和 編集

避雷柱ハ合衆国の「仏蘭克林といふ人、今より百九年前に夏の日の驟
 雨雲の中へ「エレキトルを及ふ仕械の凧を放ちて、雷電ハ雲の中の「エ
 レキトルの所作なることを知り、終に此雷除柱の工夫を發明せしといふ。
 雷避柱ハ雲の中の「エレキトルを柱の先の尖りへ吸ひ、夫より亦鎖へ吸
 ひ下げ、水の中か地の下へ散すなり。然れども雷の落来るを吸ひ寄るため
 に有らず。(一才)雲の中の「エレキトルを吸ひへらし、雷の鳴らぬやう
 にし、電の発らぬやうに為るの機械なり。

【図表 十三】



☆ 雲中のえれきとる

☆ 雷よけはしら

風船ハ此次の上に図するが如き大いなる
 袋の中へ空気より一倍軽き水蒸気の氣を籠
 め、節の蔓にて拵へたる箆の如きものを船
 と為し、その上に乗りにて空中へ昇るなり。

英吉利の首都倫敦に「琪連といふ者あり。

風船に乗を業となし、女子供といへども、其名を知らざるものなし。風船

八空を凌いで漸々に昇り（二ウ）、直に浮雲の上に出て、俯して見下せば、山川城廓の風景小美にして、箱庭の如くなり。猶、昇りて竟に七里の高きに至るを以て風船の止りとす。又、空中に居て久しきに至るも二々時半位を限りとす。「琪連ある夜、藤床の下に數百の燈籠を下げ、球を放つて空中に昇る。地下に居て是を見るに、徳星の高空に聚るが如くなれば、見物人手を叩き、仰ぎ望みて明きたる口を塞くを知らず。風船ハ猶次第に昇り、東の方を見遣れば、未だ夜中ごろなるに、日の出るを見る因りて、地上を下し見れば、猶漆々然とし、暗深く、更に物の目に觸るゝ無りしとぞ。（二オ）

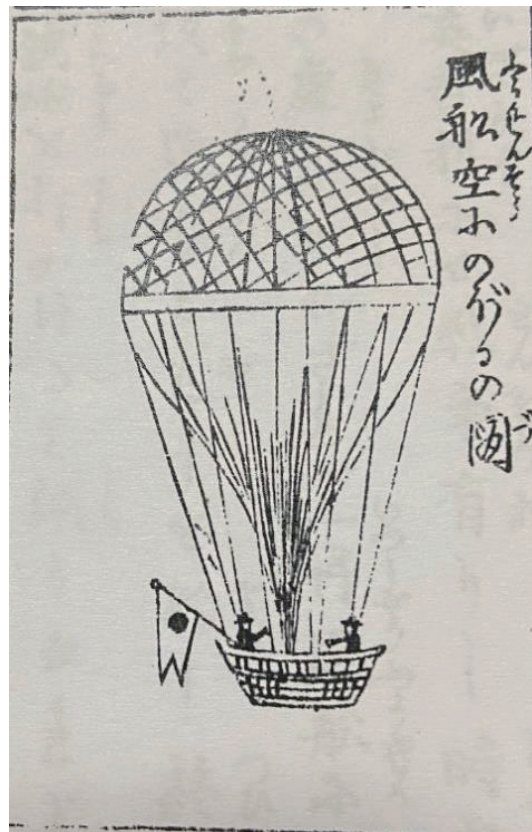
又或日、大風の時、風船を乗り上げ風に随つて横に飛すに、英吉利より海を越して南の方、佛蘭西を過ぎ、日耳曼國に入つて止る。其道程、凡二千里余なれども、僅に數時にして至る。

風船ハ平常の風にて走れば、一時に二百里を行、或ひハ二百四十里を往く。大風にて吹送れば、一時に五百里を往き、また六百里を行くといふ順風の中に忽ち風を轉じて吹回すことあれば、風船に乗るものハ必ず風雨鍼を待て、暴風を除け寒暖計を以て氣候を驗え、空中の高さを計るを專一とするなり。（二二ウ）

或人風船を放ち、空中に昇り行しに、初じめ地に近き時ハ雨の降を見たりしが、一里半ばかり昇りて、雹の降るを見、また一里ばかり昇りて雪の降を見る。又一里ばかり昇れば日の光り晴明らかにして、大空に織ほどの朦朧もなし。下を見おろせば、雲重り合て、白く綿の海の如くなる中に、

【図表 十四】

☆ 風船空にのぼるの圖



電閃めき、雷の裏くを覚ふ。又上るを數里にして天地一色物の見るべきなし。其人口哆り、息つまり寒氣甚しく頭腫耳聾煩ひ、悩みて心苦しきこと（三オ）譬ふるに物なし。携え昇りし処の鳥半ばハ、籠の中にて死

す。是全く空気の薄き境界に至りしにて、空気生を養ふに足らざるなり。又一人の風船乗り、白鴿を藤床の中に携え、藤床の下に一ツの傘を掛け、傘の下にまた一ツの箆を掛け、箆の中に小大を載せて昇り、空中稍遙かなるところに至り、刀を以て藤床の下の傘を切落せば、傘と共に箆の中の小大漸々に落、漸々に低くなり、往とき忽地大風吹発りしかば傘風に乗じて又昇り、風船の畔に来る箆の中の小大、主人を見て頻りに啼くハ援救を求る(三ウ)に似たり。風頓に止ミたれば、傘再び落つて犬恙がなし。又昇つて白鴿を放つに鴿敢て飛動かず。故に鴿を推て空中に投げ、石を落すが如し。稍地上近くに至り、翼を振ひ旋り飛。是則空気が薄くして、毛羽の軽きを乗するに足らざるなり。依つて空気濃きところ迫下りしかば、漸くにして飛ことを得しものなりとぞ。

英吉利にて戦争有りし時、敵と營を對して、陣取りしに敵勢の虚実知れざれば、一將風船に乗り、敵陣を下し、見旗を舞すを以て號令と為すを約し、終に敵陣の上に至る。敵兵空を望ミ、銃砲を打かけること頻りなれども、高くして玉届かず。風船の中の(四オ)一將空中に在て指揮すれば、軍兵旗を望んで進撃し、大いに敵軍を破りしといふ。

人二人あり。風船を作り、藤床の下に一ツの傘と一ツの箆を懸け、一人ハ上の藤床に乗り、一人ハ下の箆に乗り、空中へ昇ること、大約二里ほどにして、藤床の下の傘を釣し物を切て上下二ツと為したるに、下の傘工合違ひて開かず。猛に落つりて、直ちに地上に至り、箆の人、泥の如くなりて死す。上の藤床ハ下の重ミ放れし故か、卒然として突昇ること、矢よりも早く、是が為に藤床の人、魂魄消し飛で夢中なるが如し。良久しうして、船始めて定りたり。爰に於て珠の中(四ウ)の氣を洩らし慢りに船を下したれど、繞倅にして死を脱れしといふ。

又一人風船に乗りて、大空遙のところへ昇りしに、氣を籠たる袋球破れたれば、傘を以て風に乘じ下んと為るに計らず。傘を操りし繩一本切れれば、藤床傾き、くるく旋りながら落れば、其人眼眩暈絶入らんと欲して、地に至り僅に命在りといへども、数日の間、物言ふこと能ハざりしとなり。実に風船ハ危険の甚しきものなれば、是に乗を愚鈍者として慢りに風船を放つことハ、西洋各國合衆國にても禁制になし置とぞ(五オ)

【図表 十五】

☆ 風船巨傘をひらきたるの圖



○ 獸類の説

西洋人、犬を愛すこと普代の家頼の如くにして、他行すれば必ず是を連る。犬の種類数多あり。小なるものを犬といひ、大なるものを狗といひ、取分け大なるものを獒と為す。犬の働き最も多く、車を牽かせ、羊を牧せ、人を救はせ、夜を守らせ、盗賊を捕らへ、獵を助けさするなど挙げ難し。北極近くの地に至りて、冬ハ雪深きこと數尺廣野千里望ミ見れハ、銀の海の如し。是を往んとすれども、路の尋ぬべきなし。此時雪車に乗りて犬に曳しむ。犬七八匹にて一ツの雪車を曳く。行事迅速なり。奥蝦夷唐元の地も中程より先ハ冬に至れば、(五ウ)雪深きゆへ、雪車へ乗り、犬に引せて往來するなり。

喘吐國と噫吠哩國の境ひに峠あり。仙濱と云て至極の難所なり。兩國

の商人、この峠を越すもの常に絶ることなし。山の路崎嶇として、冬ハ風寒く、霜強く、旅人寒気に凍へ、險阻に疲れて足の進まざる折から、雪また降りいで、終に雪の為に路中へ埋められ、或ひハ半途に大雪に逢て進退きハまり、路の傍の坑窟の中に身を屈居るうち、竟に身体凍ゆるに至るもの、間あり。因りて峠に大なる小屋を建て、多く巨獒を養ひ、其犬を以て、雪に埋る人を救に、犬ハ毡粉を身に纏ひ、酒の入りし樽を項にかけ、往來へ出て、(六オ)嗅々走り回りて雪の中に人の埋りて在るを知

【図表 十六】



☆ 巨獒、雪の山に人をすくれば、獒忽地に其処を搔堀り、人を出し側に蹲居て人の氣の付を、俟人蘇生れば、犬の首に惣たる酒を呑、犬の毡粉を取りて着るなり。爰に於て、犬この所を去り、小屋にかへる人、若し凍て死すれば、獒走り歸りて小屋の番人には

を告。一匹の灵癡ありて、旅客二十二人を救ひしかば、好事の者、金を以て錨を拵へ、癡の頸にかけ、文字を鐫りて其功を記したりといふ。(六ウ)

乳母あり。小孩を抱いて、橋の上に立、詠め居たりしに、孩児喜して、躍踊りしゆへ、乳母手を外して小児を水中へ落す。傍らに抹圃居居たる巨癡、水中へ飛入り泳ぎ付て忽地に其児を銜へ来りて、以て難なく是を救ひしといふ。

西洋諸島ともに羊を牧して生活と為るもの多し。或ひハ数十或ひハ千百を以てす。羊、晝ハ山に遊んで食を求め、夜ハ野へ出て寐る。此羊の主人、大を多く養ひて羊の守りと為さしむ。若、羊亡なることあれば、犬をして尋ぬ。覓めしむれば、万にして一度も探し當らずと云ふことなしとぞ。

(七オ)

又、血癡と号るものあり。其鼻善く嗅ぐ。偷兒家に入り、物を盗んで逃去る。主人犬をして、その足跡を嗅しむるに、百里の外と雖もよく嗅付て是を捕へしむ。又羊を亡ふの家あり。是を飼ふ者、犬をして賊の跡を嗅しむるに、犬ハ嗅々道を求め、果して数里の外隣の村に羊を盗みしものを捕ふることを得たりといふ。

一人の医師あり。路にて跛なる犬を見る。呼で之を家に連戻り、試に葯



を以て療治せしに、数日にして愈る事を得たり。故にその主の家に返す。後年、此犬別に一匹の跛の犬を連れ、(七ウ) 来り。医の家に至り、尾を揺かし、鼻を鳴らし、療治を求むるの体を為す。医師再び薬を以て、これを療治し愈るに及び、二匹の犬傲喜いさんで此処を去れりとぞ。

又医師あり。獨り野道を往に、巨癡一疋裾にまといて従ひ来る。医師是を呼に、尾を揺り目を細くして、故主に逢るが如し。医師竊にこれを奇として、彼の犬を連ゆくこと数里、時に賊三四人劔を拔、道を攔て医師を捕へんとす。医師驚いて癡を呼ぶ。癡賊を嚙こと猛勢なれば、賊狼狽て、

【図表 十七】

☆ 大象の圖

開き靡くうちに、医師逃れて帰ることを得たり。爰に於て彼の癡を止めて養ハむと為るに、癡逃れて(八オ) 去り、終に往ところを知らざるなり。

象ハ亜細亜島の南より、また亜非利加の中に産す。身の丈一丈、高さ七尺、力ハ馬を九匹寄せしより強し。大窓大いに耳長く垂れ、鼻ハ五

尺、牙ハ七尺あり。鼻の先に小指を出し、人の手の指の如くに働く。寿命ハ百年の餘を保つ。鼻を捲て樹を抜こと、農夫の蔬を抜くより、手軽し。熱き時ハ河に入りて身を浸す。常に群を為して山林を横行するに、一群々々に王ありて、或ひハ数十或ひハ数百、ミナ王の後方に従ひて、王を尊敬すること甚しく、王行バミナ行、王止まれハ、ミナ止まる。象（八ウ）連「る」。河を渡れば並んで、ミナ鼻を空に伸立行ゆへ、遠方から見れば、河の中に肉の柱を建しが如し。象を囚ふるにハ、象の路へ陷阱を作り置て是に落すなり。象坑に落て怒ること甚し。然して、追々腹の空るに至り、漸くに疲る。此時に坑の上より草を投げ与へて養へバ、象食を貰ひたる恩に感じて、次第に馴れる。十餘日を経て坑より出し、家に連往、飼ひ、象と一ツに置に、この象再び山林に棲をするの念なし。また一ツの法にハ象の春情の附たる時、飼象の牝を（九才）野象の居るところに放し置て、象奴坑を掘りて、其中に隠れ居るなり。是を見て野象の牡来り、この牝と交接に至り、親しミ馴て餘念なき時機を窺ひ、象遣ひ竊に坑より出て、大繩索を以て、象の足を繋ぎ、然して是を馴すに食を与ふるを以て為るなり。象なれて後、索を解て家に連れかへるなり。象を遣ふにハ、象の頸と

項とに跨り座し、鉄の鞭を以て言ことを聞ざれば耳を刺すなり。印度にてハ戦争の時、象を用ひて銃砲を抬しむといふ。

爰に一軒の衣服を製す見世あり。職人大勢衣服を拵らへ（九ウ）居たりしに、門口へ象奴、象を曳来り休ミ居たりしが、象ハ鼻を伸し、彼の衣服を製す見世の床の上へ乗せ、置ければ、職人ども戯れに鼻の先を針にて刺けれとも、象ハ痛さをこらへ、知らぬ振りして、頓て此処を往たりしが、戻

【図表 十八】

☆ 大獅、獸中の王



りに及び何処にてか泥水を口の中へ含ミ来り、彼の見世の前へ来ると鼻を刺たる職人の天窓の上より泥水を噴あびせて往。是を見るもの皆手を叩いて大いに笑ひを催したりとぞ。又一ツの象あり。怒り狂ッて欄を踊り出す。路行人ミな恐れて逃走る。一人の女、児を連れて此処へ来かゝりしが、餘りに

狼狽ければ、兒を置いて傍へ逃る。衆人ミな早く兒を助け来れといふ。女、
 大いに(十才)驚き、兒を連に往んと為るに、象忽地こゝに來れハ、此兒
 象のために殺されんかと憂ふ。象、その兒に走りかゝる。衆人嗟やと見る
 中に、象ハ鼻を以て兒を抱きて路の傍らの石の上に置いて過ぐ。衆人ミな怪
 しんで、その故を彼の女に問ふに、この女菜を賣を以て生活とするゆへ、
 象に遇ごとに菜の賣餘り有れば与えしに因りて、斯怒れる中にも又能恩を
 忘れず、兒をかたよせしものならんと云へり。
 又某の家の象遣ひ、誤つて象の鼻柱を強く拂ふ。象怒りて是を殺す。象
 遣ひの妻、兒を抱いて象の前に來り大いに歎ず。(十ウ)吾夫家貧しきが
 故に、身を屈めて牧と成つて、その日を送るに、今汝猛惡を逞しうして、
 吾儕また此子をして便るところ無らば、汝この子の父を殺す逆もの事
 に此子も殺せと言て、抱きたる兒を象の下に置たるに、象ハ頭を垂れ、良
 久しく濫えたる如く成りしが、頓て鼻を以て兒を卷て我項の上に置。そ
 の心ハ此兒をして父に代え、牧と為さしむべきとの事ならんと思ひ、彼の
 象の主人、其兒を以て牧と為すに、象また先に比ぶれば、柔らぎ馴て自由
 につかハれたりといふ。(十一才)

獅ハ亜細亞の中印度の辺、又南亞米理加に産す。身の長四尺、高さ三尺
 餘、首より尾の先まで長さ八尺。その状ち獐惡。地に俯して大いに吼れば、
 声遠雷のごとく。百獸ミな恐る牛を捉へ、馬を摘へて背に負て走る。威を
 奮つて一蹕蹕れば、牛馬の背ミな裂け骨摧けて死す。飢を凌ぐことハ能く
 數日を堪ゆれども、水ハ必らず一日に一度飲ざることを得ず。一人の黒人、
 牛を牽て水を飲せ居たるに、池の中に二ツの眼の玉ありて、光り曜き黒人
 を視詰て更に目たゞき(十一ウ)せず。黒人飢たる獅なることを知り、牛
 を捨て疾く逃る。獅果して水中より踊り出し、牛を撞て倒し、また牧奴を
 逐ふ。牧奴はやく木に上つて避る。獅、木の下に蹲居り、仰ぎ望んで涎
 れを流し、二日一夜守りて動かす。漸渴するに至り、水を呑まんと泉に走
 る此間に牧奴走つて逃歸る。獅また故の所に至り、跡を躡で、直ちに牧奴
 の門に來り、次の日漸くにして、去りたりと云へり。虎身の高さ三尺、
 首より尾まで長さ七尺、声能物を振ひ、力よく牛を負て走る。亜細亞
 の中の印度、新喜坡、蘇門答立の地に最も多し。今より五十年ほど前に
 英吉利領の(十二才)印度に於て、人民虎の害に逢もの多し。因りて
 英吉利人、虎狩をはしめ、一匹の虎を摘獲るものにハ、元銀數十兩を以て

褒美に遣ハすべしと觸ければ、土人等大いに奮発して、夥しく虎を狩取りければ、一年の内に褒美金七万五千餘兩に及びたり。然れども其種類を絶すこと能はず。近年に至りて、また樵父旅人などの害に逢ふもの多しといへり。

蘇門答立の地ハ獼猴甚た多く群れ集りたる。獼虎の来るを見ると狼狽走つて皆木に昇る。虎を逐ひ、樹の下に到り、仰いで目を睜り、一声猛に咆哮、振ハせれば、獼猴恐れ慄いき手枝(十二ウ)を放れ、足幹を外るゝを知らずして、梢より落ること、木の菓の如しといへり。

南亜米理加笏も猴至つて多き所にして、木の菓熟する時ハ群を為して来り。暫時にして一木を尽して採り去る。はじめ木の実を取らんと為る時、一疋の老猴高きところに登り、四方を見渡して、張番を為し、然して後に群を為し、列を立て、猴出来たり。木に昇りて果を採り頃刻にして拏尽し、又他の木に移りて採る。此とき、樵父・狩人などを見掛れば、張番の猴一声叫ひて他の猴に知らすれば、群猴忽地(十三オ)散じて、跡を見せず。若彼の見張番の猿、人の来るを見損んずる事有れば、巢へ歸りて後、多くの猿寄り集りて、是を打殺すといふ。狡猾なること斯のごとし。

【図表 十九】

☆ 虎うそぶいて風を発すの圖



豺狼ハ何れの國にも在りといへども、我羅斯の地邊最も多し。丈ケ三尺、高さ二尺、衆群連つて往来す。一個の人、馬車に乗りて山に往しに、路にて多くの狼頭ハれ出で、馬車の後べに着き来る。その意、間を窺ひて採り食ハんと為るにあり。是によりて、(十三ウ)その人大いに恐れ、慄戦魂魄縮ミて、為す術を知らず。然るに車の中に長き麻繩あるを見出し、其索を以て窓の外へかけ、幾重とも無く結びたるに、衆くの狼ミな佇ミて望ミ居たりしが、是必らず網罟を張たるならんと疑がひしにや、皆悉く散じ去れりといへり。

俄羅斯國にて一隊の騎兵、馬を双べて往しに、衆くの狼漸々に来りて、この隊を圍む。各銃炮を發して、以て百餘匹を打斃すといへども、狼猶

何処よりか集り来り。圍ミを厚うして弥去らず。爰に於て終に彈藥を打
 尽し、狼の為に(十四才)皆喰殺されたり。其慘毒の甚しき斯のごとし。
 歐羅巴の北地「ランキユードツク」の諸山ハ雪深き故に、冬に至れば狼食
 に飢て人を害すること、甚多し。英吉利の魯敏遜といふ人、漂流の島よ
 り故郷へ帰るに十一人を従がへ皆馬に乗りて、此処へ来かゝりしに、案内
 者一人、先達て進ミ往を、大なる狼二頭不意に飛かゝつて、一八人に
 噛付、一八馬に噛付。普降といへる者、是を見て早く炮を發し、二頭の狼
 を倒せば、余の狼散じ去る。爰に於て道を急がせ往と數里にして、日既
 に暮んとするに、狼の長吼嘯りに聞ゆ。因りて十二人の者皆(十四ウ)
 銃を備へ眼を配りて往。暫くして、怒狼百頭ばかり整々として向ひ来る
 さま、良將の指揮を得て、隊伍を配るが如し。故に馬恐れて進ミ得ず。
 十二人の者炮を發して狼六頭を斃し、多く狼に傷付ければ、余の狼ミ
 な散ず。十二人の者鯨波の声を揚て、威を示し往こと、又一里ばかりにし
 て、日既に暮たり。時にまた狼の長吼すること夥敷ければ、衆人四辺を
 窺ふに、此度ハ猶數百の狼、三面より向ひ来り。遠卷に圍ミ、隙間あら
 ば馬に飛かゝらんとす。十二人の者弥叫んで威勢を付進ミ往に、狼次第

に群を増し、其數三百頭に過たり。然して早飛かゝらんと為るさま(十五
 才)なれば、大材の倒れたるを見付、僥倖是を小盾となし、各銃を構えて
 待。又狼の来るべき方へ火薬を伏せ置たり。此時、狼いよく迫り来り、
 火薬を伏せたる辺に集る。因りて各銃を發して、先六頭を斃す。狼怒つ
 て皆かゝらんとす。時に一發火薬に當り、火薬忽地發して、狼是に斃さ
 れ、死する者甚多し。此火炎の猛烈なるに恐れしにや、狼散じ去りて、
 又来らず。漸く難を逃るゝ支を得たり。此時狼を殺すこと七八十頭、傷付
 るもの百五六十頭に及びしとぞ。
 駱駝ハ亜細亞の西比耳西亜・土耳其・伊犁・後藏・埃及とうに(二五ウ)
 最も多し。歐羅巴・亜米利加にハ絶てなし。力強くして重荷を負ひ遠き
 へ往。常のものハ一日に八十里、迅なるものハ一日に三百里を往。壯な
 るハ千斤を負ひ、弱きものも數百斤を負ふ。人荷を附んとすれば、駱駝膝
 を折りて荷を請く。荷の重さ、我力に足りれば起、若し其荷重くして、我
 力に過れば鞭撻といへども起て往ことなし。寿命ハ五十年に過ず。水の在
 るところハ鼻を以て嗅て、十里外のもの雖ども是を知る。其腹よく飢を
 忍ぶこと數日、又咽を乾かすことなし。胃の中に別に水貯有りて、爰に

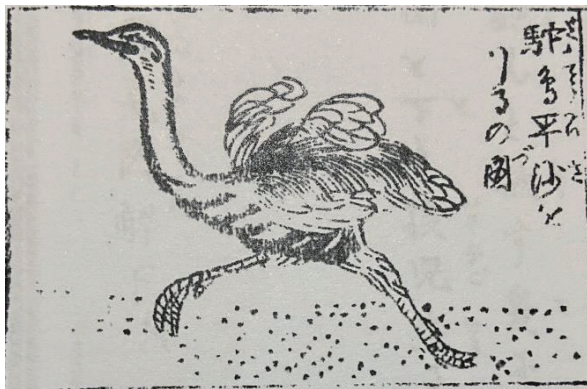
清水を貯へること十餘斤、自ら咽の渴くときの用に備(十六才)。或商人駱駝に乗りて沙漠の地を過るに、更に一滴の水も無れば、咽喉渴きて死せんと為るに至る故、餘義なく駱駝を殺し、胃を割て水を採り、是を飲で命を助りしといふ。沙漠土番の地にては駱駝を陸舟といふ人を乗せ、荷を負ふの功あるを以てなり。その性能忍び耐るといへども、慢りに是を責れハ、訛を返すの智慮あり。或暴人駱駝を遣ひ苦しむること、最も甚し。然れども駱駝怒りを忍んで、常に變たる体なし。夜深く人静るに至り、駱駝欄を出て奔つて、彼の者の寐たる処に往、その衣服を皆尽く嚙破る。此時彼の者(十六ウ)僥倖に他出して、其処に寐ず。外よりして帰りに來る。駝是を見て我計策の成らざるを知り、終に自から氣死為るといふ。峩羅斯國の北極に近き地ハ寒冷にして、氷雪常に消ず。硯凝結んで錫の如し。弥北に往バ氷雪の山高く聳へ、四面冷凜として啓明畏るべし。一時暖氣の事あり。冰山崩れ陥りし中に、死したる獸あり。形状古き特の如し。象より大いにして骨肉鮮新し。熊争ひ聚りて是を食ふ。土人馳集つて國王に此事を報ぜしかバ、王博識の者を遣ハして(十七才)是を驗せしむるに、二十年を経し物ならんといへり。因りて其骨を博物館に収め、今

に傳えて古器と為すとぞ。

○鳥類の説

亜細亞筋の中の大沙漠曠野の地に羽あつて翼なき鳥を産す。駝鳥といふ。其走ること馬より早し。怒れば蹄を以て蹕踴。物に遇へバ、追かけ足を以

【図表 二十】



☆ 駝鳥平沙を行事の圖

て砂石を抓、後方へ擲つ。其勢ハ鏢砲玉の如し。是を受けハ忽地傷を象る。又一種亞非利加筋に産するもの(一七ウ)あり。身の高さ七八尺養ひ馴れば、荷を負して使ふ。其用馬の如しといふ。峩羅斯國に産する鷩あり。嘴より尾に至りて四尺兩翼を伸れば、一丈に及ぶ。或山の下の家の縁の先に孩子の遊べるあり。時に大いなる鷩、空中より突き下り、孩子を抓き凌ひて飛去る。半空に至るまで猶孩子の泣声を聞く。其母かなしミ骨髓に迫り、足ざりして

大路おほちに立たつ。彼かの大鵬おほわしの往ゆくところを視みれば、大鵬おほわしハ孩兒おきなこを絶巘ぜつせんの上うへに置おく。
 岩石がんせきせんじん千仞せんじんにして如何いかんとも為なすべきよふなし。爰こゝに勇氣ゆうきの人あ有あつて力ちからを極まへ
 めて(一八才)絶壁ぜつへきに攀登よちのぼるといへども、果はたさず。山やまの半腹はんちやくより返かへり来きたる。
 その母身はつみの危あやふきを顧かへりみず、蔦つた葛かづらの蔓つるに縋すがり、岩石がんせき樹きの根ねに採附とりつひて命いのちを
 極まへめて、終つひに山やまの嶺いただきに至いたれば、果はたして孩おきなこ子こ、骨朶かねたの中うちに臥ふしたり。衣服いふくち血ち
 にしたゝり。啼入なまりて息絶いきたえんと欲ほつす。爰こゝに於おいて、母はつハ孩兒おきなこを懷中ふところに抱いだいて
 幸かろじて山やまを下をり、孩兒おきなこ生なることを得えたりといふ。

聞見ぶんけん図解づかい下 終